

[共同研究：日本文化研究の新しい地平]

## 往還する日本庭園の文化史

——ジョサイア・コンドルの日本庭園論の考察を中心に——

片 平 幸

1. はじめに
2. コンドルの日本庭園論
  - (1) ヨーロッパの庭園に対する批判——ピクチャレスクとシノワズリーの風景
  - (2) 「理論」と「License」——「型からの逸脱」について
  - (3) 思想性の不在——造形に対する理解とのタイム・ラグ
3. コンドルの日本庭園論に対する国内の反応
4. 結語

### 1. は じ め に

イギリス人建築家ジョサイア・コンドル（Josiah Conder, 1852-1920）の *Landscape Gardening in Japan* は、英語による初めての体系的な日本庭園論であり、1893年に出版されて以来、現在に至るまで、欧米人による日本庭園論に頻繁に参考文献として挙げられている。一方、日本国内では、コンドルの日本庭園論に関心が向けるようになったのは1930年代に入ってからであり、その際に、庭園研究者たちによって下された評価は、けっして高いとはいえないものであった。本稿で検証するように、1930年代に下された評価は、当時の歴史的文脈において改めて問い直す必要があるにもかかわらず、その後、今日まで継承されている。そのためか、コンドルの日本庭園論は、これまで国内の庭園研究者たちに十分に考察されておらず、近年でも、コンドルに言及する際には、1930年代のコンドルに対する評価に依拠し、原典の考察が省かれるような状況も見受けられる<sup>1)</sup>。建築家としてのコンドルに関しては、評価や研究が安定して蓄積されている一方で、かれの日本庭園論は十分に検証されてきたとはいえず、日本の庭園研究におけるジョサイア・コンドルの評価は、欧米での評価とも、建築研究における評価とも大きな隔りがある。

コンドルの *Landscape Gardening in Japan* は、欧米の読者を念頭に執筆されているが、単なる英語による日本庭園の紹介という枠を越えて、19世紀末のイギリスで日本庭園に対して

1) 進士五十八『日本庭園の特質』（1987）や鈴木誠『欧米人の日本庭園観』（1997）では、コンドルに言及する際に、佐藤昌「外国人の見たる庭園」（『園芸学会雑誌』第四卷第一号、1933年4月、83-106頁）の中のコンドルに関する要約が引用されており、原典との照合は省れている。

キーワード：日本庭園、ピクチャレスク、イギリス、日本近代、シノワズリー

どのような関心が形成され、受容の背景とはいかなるものであったのかを映し出す文化史的な資料としての性質を備えている。それだけでなく、日本の庭園研究者たちのコンドルに対する冷やかな反応は、20世紀に入って構築されつつあった国内の庭園研究の価値体系をも映し出すものである。そこで本稿では、まず、コンドルの日本庭園論を精査し、イギリスにおける日本庭園受容の文脈を明らかにしたい。さらにコンドルに対する国内の庭園研究者たちの反応を検証し、評価の形成過程においてどのような意志が交錯したのか、あるいはどのような力学が作用したのかについても論じていく。コンドルの日本庭園論と日本側の反応の分析を通じ、日本庭園の理解をめぐって、日本とイギリスの間にどのような往還があったのかを明らかにしていきたい。なお、本稿における「日本庭園」とは、gardens of Japan に対応する概念として用いており、日本にある庭園を包括的に指す用語とする。

## 2. コンドルの日本庭園論

*Landscape Gardening in Japan* (以下、著書) を出版する7年前の1886年に、コンドルはその原型となる論文“The Art of the Landscape Gardening in Japan” (以下、論文) を日本アジア協会の機関誌に発表している。これまで論文の存在は指摘されながらも、所見の限り内容については、詳細な分析の対象として十分に扱われてはきてはいない。これまで見過ごされがちであった論文は、コンドルの日本庭園論の結実ともいえる著書に対する理解をより一層充実させるものであり、思想的背景を明らかにする上で、きわめて重要な資料であると考えられる。そこで以下では、論文と著書の双方からコンドルの日本庭園論の特徴をまとめ、執筆の背景にどのような関心や知的枠組みがあったのかを検証していく。

コンドルの日本庭園論の主な論点は、次のようにまとめることができる。一つは、西欧で発達した庭園との対比、より正確に言えば、単なる比較というよりは、西欧の庭園に対して批判的な立場から日本の庭園を論じていることである。もう一つは、日本庭園における「型」と「型からの逸脱」という一見相反した原理の重要性を説いたことである。「型」を遵守しながら「型からの逸脱」がどのように日本では実践されているのかを論じた部分は、コンドルの日本庭園論の大きな割合を占めている。そして三つ目として、造形上の情報に比して、思想に関する記述が少ないこともまた特徴として挙げられる。以下では、これら三つの特徴を時代的、そして思想的な背景と照合していく。

### (1) ヨーロッパの庭園に対する批判——ピクチャレスクとシノワズリーの風景

コンドルは西欧の庭園と対比することによって日本庭園の特徴を浮かび上がらせようとしているが、その描写にはコンドルの批判的な見解が透けて見える。以下にみるのは、論文からの引用でコンドルによるヨーロッパの庭園の描写であるが、この箇所は、七年後の著書にもほぼそのままの形で継承された。

Again, the European landscape gardener further embellishes his grounds with architectural constructions of most heterogeneous character. Greek temples, ruined arches, funereal urns and monuments, obelisks, rustic cottages, Italian bagnios, Turkish kiosks, and Chinese bridges are capriciously interspersed in the most celebrated gardens. All forms associated, in poetry or romance, with the picturesque and the fantastic are introduced with very little regard to congruity or appropriateness. Such eclectic principles contrast in a marked manner with the purely native character which pervades the designs of Japanese horticulturists<sup>2)</sup>.

ヨーロッパの風景庭園の庭師は、もっとも異種の性質をもつ建築物でなおいっそうと敷地に装飾を施していく。もっとも名高い庭園には、ギリシャの教会、荒廃したアーチ、墓とモニュメント、オベリスク、田舎のコテージ、イタリア式の浴場、トルコの東屋、中国の橋が空想的に撒き散らされている。詩や挿話のなかで、ピクチャレスクと奇想と結合したすべての形象は、調和や適切さとはほとんど考慮されることなく導入される。このような折衷主義的な原理は、日本の園芸家達によるデザインに浸透している純粋な日本の特徴とは際だって対照的である。

一つの庭に、ギリシャやイタリア、そしてトルコや中国など異なる地域と時代の要素が入り混じっている様子が描かれている。ここでコンドルが描写しているのは、18世紀のイギリスで生まれ、その後ヨーロッパに広まっていった風景庭園（Landscape Garden）または自然式庭園と称される庭園様式である。風景庭園には「調和や適切さ」が欠けており、それが日本の庭園と対照的であるというコンドルの認識は、論文と著書を共通して見いだせる。風景庭園との比較、あるいはそれに対する批判が繰り返されるのだが、ここで日本庭園と対置されている風景庭園が誕生するまでの経緯を簡単にまとめておきたい。これは西欧の庭園史のなかにどのように日本庭園が位置づけられたのかを知る手がかりでもあり、日本庭園への関心がいかなる文脈で形成されていったのかを明らかにすることにも繋がっている。

風景庭園とは、それまでヨーロッパで主流であった幾何学的な整形庭園を「不自然」とみなし、より「自然らしさ」を目指す様式として18世紀のイギリスで生まれた。その後、ウィリアム・ケント（1686-1748）やランスロット・ブラウン（1716-1783）らイギリスの庭園家たちによって確立され、イギリスだけでなくヨーロッパ各地で流行していった。これより以前にヨーロッパで主流だったのは、ヴェルサイユ宮庭園などに代表されるような幾何学的で左右対称に構成された整形庭園とよばれる様式である。この様式は16世紀のイタリアで生まれ、17世紀のフランスで発達したことから、フランス式庭園とも呼ばれるが、フランスだけでなくヨーロッパ全体に広く造営されていった。整形庭園は、「比例均等美を駆使した園景」

2) Conder, Josiah, "The Art of the Landscape Gardening in Japan", *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol. XIV, (Yokohama: R. Meiklejohn & Co., 1886, pp. 119-175), p. 122.

と表現されるように、左右対称で規則的な直線を用いていること、幾何学的な図形で構成されていることを特徴とする。17世紀以降にも、ヨーロッパの各地に造営された<sup>3)</sup>。

[図1-2. 整形庭園：左右対称で、直線的、幾何学的なデザインを特徴とする]

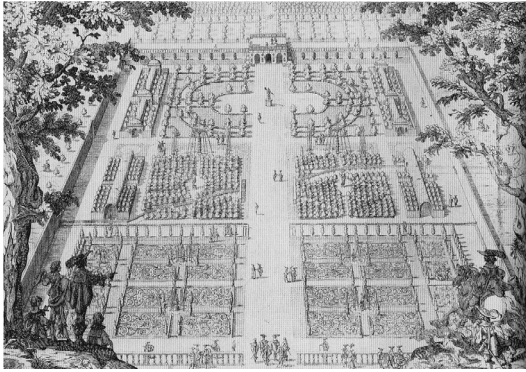


図1.

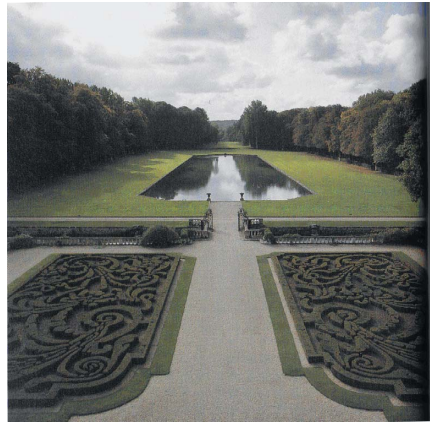


図2.

[図1. Wilton House, UK, 1632-35. 風景庭園の誕生前のイギリスの整形庭園の平面図。]

[図2. Château de Courances, FR, 1622. 左右対称で幾何学的な構図のフランスの整形庭園。]

一方、イギリスで生まれた風景庭園は、左右対称の幾何学的な整形庭園の、いわばアンチ・テーゼとして、左右非対称で不規則な曲線によって理想的な風景を作り出そうという理念に基づいて生まれた。

[図3-4. 風景庭園：左右非対称で、曲線的なデザインを特徴とする]

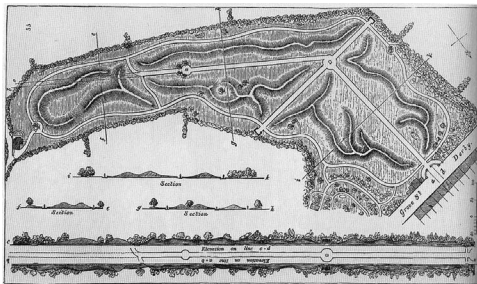


図3.

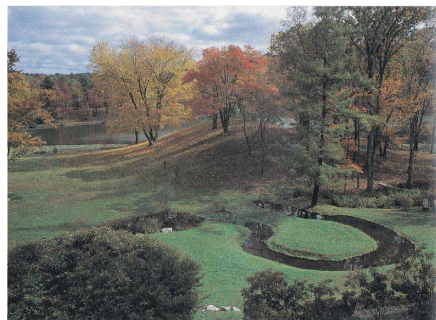


図4.

[図3. Derby Arboretum, UK, 1840. 風景庭園の様式のイギリスの公園。]

[図4. Innisfree Garden, USA, 1930. 中国の風景画と小説を元に造営された風景庭園。曲線的で高低差を強調したデザインで、シノワズリーとピクチャレスクの影響が認められる。]

3) 風景庭園の成立については、Christopher Thacker, *History of Gardens* (1979), *The Genius of Gardening* (1994), 川崎寿彦『庭のイングランド——風景の記号学と英国近代史』名古屋大学出版会 (1983) や、高山宏『目の中の劇場』青土社 (1985) などに詳しい。イギリスの風景庭園の誕生を、英国の近代社会史のなかに位置づける説などもある。

風景庭園の誕生には、上記の引用中にもある「ピクチャレスク (picturesque)」という18世紀のイギリスで台頭した美的概念の成立が密接に関わっていた。ピクチャレスクとは、山脈や岩壁など自然界の荒々しい風景に美を見いだす概念であり、それまでの調和的な美への対立概念としてプライス (1747-1829) やナイト (1750-1824) など18世紀のイギリスの美学者たちによって定義された。それまで美しいとされていたものとは対照的な、「ruggedness (ごつごつとした)」や「zigzag (ジグザグな)」と表されるような風景を「自然」とみなす概念であり、18世紀イギリスの諸芸術を理念的に支えていくようになった。それまでの美意識とは「異質」のものを追い求めるピクチャレスクは、やがて「過去」や「異国」への憧憬や理想化へととも発展していく。荒々しい風景に加え、「古代」や「異文化」までもが、幻想的な架空の景色として、絵画や文学作品などに描かれ、庭園にも取り入れられていったのである。つまり、ピクチャレスクによって象られた風景庭園とは、ヴェルサイユ宮殿のような左右均整で規則的、そして幾何学的に花壇や噴水そして並木道を配置した整形庭園からの脱却という性質をもって成立していったといえる<sup>4)</sup>。

[図5-6. ピクチャレスクを象徴する風景画と庭園]



図5.



図6.

[図5. Hafod, UK, 1783. T. Jones がウェールズに作った庭園の絵。まるで山脈のような風景が再現されており、ピクチャレスクの影響が顕著な庭園の様子が描かれている。]

[図6. Buttes-Chaumont, FR, 1870. フランスの風景庭園。ごつごつとした岩壁からは滝が流れる。東屋がおかれ、荒々しい風景と異国が再現されている。コンドルは、ピクチャレスクが具現化され、自然らしさを失った庭園の例として本庭園を挙げている。]

ピクチャレスクという理念を含みつつ成立したイギリス式風景庭園だが、それまでとは異なる「自然らしさ」の追求は、次第に不規則性や不均等、そして「異質さ」の過度な導入へと繋がっていく。こうして廃墟や洞窟、水道橋や神殿など、時代も地域も異なる要素がイギ

4) ピクチャレスクについては、安西信一『イギリス風景式庭園の美学——〈開かれた庭〉のパラドックス』東京大学出版会 (2000) や、高山宏『庭の綺想学——近代西欧とピクチャレスク美学』ありな書房 (1995) を参照。ピクチャレスクと連動した風景庭園の成立は、イギリスにおけるアンチ・フランス、アンチ・イタリアを背景に台頭したものとする解釈もある。美的概念の領域を越え、社会現象であったというとらえ方を提示している論考などがある。

リス式風景庭園の上に「撒き散らされている」状況になっていった。先に見たコンドルの引用は、自然らしさを追い求めたが故に、結果的に人工的に様式化されるというピクチャレスクと風景庭園の倒錯した状況を描写したものであった。

風景庭園が本来の理念とは真逆の「不自然さ」をもつようになったもう一つの重要な理由として、コンドルが中国庭園の影響に言及していることに触れておきたい。18世紀末のイギリスの庭園家でキュー・ガーデンの作庭を手がけたウィリアム・チェンバーズ (1723-1796) の *A Dissertation on Oriental Gardening* (1772)<sup>5)</sup> を引用し、コンドルは、イギリス式風景庭園の自然らしさの喪失に中国庭園の影響があったと考えていた。

To such imaginary descriptions as the above may partly be attributed the extravagant taste for grotesque garden structures of Eastern form, and for a confused variety of fanciful scenes, which gradually destroyed the naturalness of English landscape gardens<sup>6)</sup>.

（上記のこのような想像の描写（チェンバーズの著書のなかの中国の描写：筆者註）は、東洋の様式がもつグロテスクな庭園構造への豪華な嗜好や混乱したさまざまな空想的な風景に起因するものかもしれないが、それらは次第にイギリス風景庭園の自然らしさを破壊していった。

チェンバーズによる中国の風景や庭園の描写を引用し、コンドルは、東洋的な要素の導入によってイギリスの風景庭園の自然らしさが失われていったと論じている。*A Dissertation on Oriental Gardening* は、著者であるチェンバーズ自身の観察と中国人芸術家との交流、そして旅行記に基づいて書いたとされるが、執筆の背景には、ヨーロッパで流行した「シノワズリー」の影響が認められる。「シノワズリー」とは、「中国趣味」を意味し、17世紀半ばのヨーロッパで生まれた美術様式を指す。ヨーロッパの貴族階級を中心に広まった中国の陶磁器などから、その図案を模した中国風のデザインが流行していくが、次第に後期バロック様式やロココ様式などとも融合し、陶磁器だけでなく、建築や庭園など広く諸芸術にみられる様式となっていく。中国から伝わった様式というよりは、ヨーロッパの生み出した想像上の中国がモチーフとなっており、独特の装飾性やデザイン性を特徴とする。18世紀に入ってから、シノワズリーは、「異質さ」を好むピクチャレスクとも相俟って、中国風の塔や大きな岩石が配置されるなど風景庭園に取り入れられていった。コンドルは中国の庭園を、「巨大で複雑な岩石を蜂の巣状の洞窟やグロットに加工するなど、日本の庭園よりも贅沢に装飾されている」と評している<sup>7)</sup>。コンドルにとって、中国庭園の影響とは、独特の装飾性を意

5) ウィリアム・チェンバーズ (William Chambers) は、スウェーデン生まれのスコットランド系。東インド会社を通じて中国へ渡り (1742年と1749年)、1755年にイギリスに帰国し建築と作庭を手がける。

6) Conder, Josiah, *Landscape Gardening in Japan: With the Supplement of 40 Plates*. (New York, London, Kelly & Walsh LTD, 1893), p. 4.

味し、風景庭園の「自然らしさ」を破壊する大きな原因であった。コンドルは日本庭園の特徴を中国庭園の装飾性と対照的に定義し捉えており、両者の様式上の差異を明確に区別していた。

[図7-8. シノワズリーの影響]



図7.

[図7. Yu Yuan, 中国, 1577. 中国の庭園の石。このような石が描かれた風景画や陶磁器の様子がヨーロッパに伝わり、庭園にも「シノワズリー」として取り入れられた。コンドルはこのような石を「ハチの巣状」と表現しており、ヨーロッパの庭園の自然らしさの喪失を引き起こしたと考えていた。]

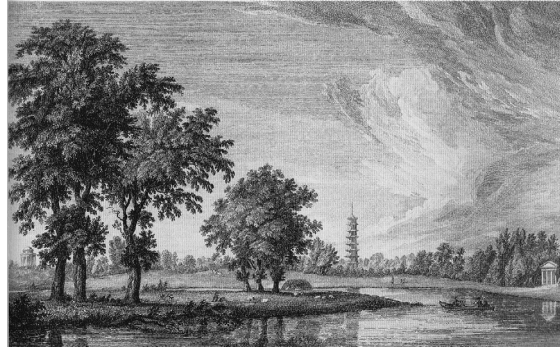


図8.

[図8. Kew Garden, UK, 1757. W. チェンバーズ作庭。中国風のパゴダが置かれた風景庭園。他にも日本風やトルコ風、ギリシャ風の装飾物がまさに「撒き散らされた」風景。]

ヨーロッパの整形庭園から失われた「自然らしさ」の復権を掲げたはずのイギリスの風景庭園は、ピクチャレスクやシノワズリーの影響を含みつつ、「自然らしさ」を喪失する方向へ発展していったというのがコンドルの見解であった。先の引用でみたような、文学や詩に表現されるような想像上の古代や異文化が、本来の文脈から切り取られ一つの庭園上に寄り集められたのである。古代ローマを思わせる荒廃したアーチや廃墟のようなイタリア風の浴場、そして中国の橋や塔などが、わざわざ新しく作られ、こうした異質な要素が風景庭園を彩っていった。コンドルが批判的に捉えていたのは、このような風景庭園の極端な人為性である。

「自然らしさ」の喪失——こうした西欧庭園観がコンドルの日本庭園論の前提であった。つまりコンドルには、西欧が失った「自然らしさ」を日本庭園がそなえていると映ったことになる。コンドルは、西欧の庭園とは、「世界中の希有で美しい標本が寄せ集められ陳列さ

7) Conder, "The Art of", 1886, p. 124

れた美術館」,そして「万華鏡」であるとも表現し,西欧近代を象徴する視覚装置に準えてもいる<sup>8)</sup>。西欧近代における庭園の自然らしさの喪失と,視覚優位の美意識の発達とが,あるいはコンドルのなかで結びついていたとも考えられる。この点に関しては,さらに西欧近代の文化史との照合が必要になってくるが,美術館や万華鏡という比喩を用いられたヨーロッパの庭園と対置された日本庭園において,コンドルは,「自然らしさ」がどのように保持されていると理解したのだろうか。次に,コンドルの日本庭園論の二つ目の支柱ともいえる「型」と「型からの逸脱」についての記述を検証していく。

## (2) 「理論」と「License」——「型からの逸脱」について

コンドルは論文と著書を通じて,日本庭園においては「contour, form, and proportion (輪郭・フォーム・比率)」がもっとも重要であると繰り返し論じている。ヨーロッパの庭園では,「色」が重要な役割を担っているが,日本では,「色」よりも「輪郭・フォーム・比率」が優先されていると対置した上で,不自然な規則性を避けるために細心の注意が払われていることを強調している。さらにこのような作庭上の理論が記された指南書として,籬島軒秋里の『築山庭造伝』(1829)が,論文と著書の参考文献として挙げられている。以下では,コンドルがどのように秋里を参照し,さらに「型」としての「真行草」と「石組」に関してどのような解釈を示したのかを検証していく。

まず「真行草」については,日本庭園を作る際の理論として,「真」はもっとも完成された型,「行」は中間の型,そして「草」はもっとも自由な型であるとそれぞれ紹介した上で,コンドルは論文の中で以下のような解釈を示している。

First as regards the theory of Japanese landscape gardening. It is usual to divide garden compositions into three styles expressive of their general character. These divisions are called Shin, Gio, and So, which in the present context may be translated as Finished or laboured style, Intermediate style, and Free or bold style.

In practice these styles are not sharply divided, but a garden according to its rough or elaborated character may generally be classed under one of the three heads<sup>9)</sup>.

通常,庭園の構成は,一般的な特徴から三つの型に分けることができる。それらは,真・行・草と称され,それぞれ完成したまたは発展した型,中間の型,そしてもっとも自由で自在な型である。

実践上はこれらの型は明確に区別されていないが,それがもっとも自由であるか精巧であるかの特徴によって,この三つのどれかに分類される。

8) Conder, "The Art of", 1886, pp. 120-121

9) Conder, "The Art of", 1886, p. 125



「真行草」を庭造りの「理論」として説明しているが、同時に、これらは実践上では明確に分類されていないという事実も伝えている。ここにコンドルは、「真行草」という「型」からの「逸脱」が実践では存在していることを示唆している。実践においては厳守されるわけではない型——こうした理論と実践のギャップを指摘し、「型」には回収できない、「型」からの逸脱」が日本庭園の構成に存在するとコンドルが理解していたとみなしていいだろう。秋里を参照しつつ「真行草」について紹介する箇所は、7年後の著書にはさらに図解つきで多くの紙面を割いて説明されている。コンドルの論文が発表された四年後の1890年、洋画家の本多錦吉郎が秋里の『築山庭造伝』を基に『圖解庭造法』を出版するが、コンドルは1893年に著書を出版する際には、秋里を踏襲した本多の『圖解庭造法』をも参照し、本多の描いた挿絵を転載している<sup>10)</sup>。つまり「真行草」に対する理解は、論文と著書に共通しており、著書ではさらに明治期の参考文献なども加えながら視覚的な資料を取り入れて説明がなされているのである。

[図9-11. 真の築山の図の継承と変換：秋里から、本多錦吉郎、そしてコンドルへ]

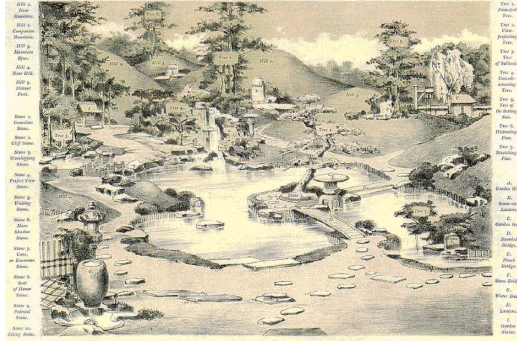


[図9. 秋里籬島『築山庭造伝』の「真の築山の図」]



[図10. 本多錦吉郎『図解庭造法』の「真の築山の図」, 秋里の図を透視画法を用いて描き直している。]

10) 本多錦吉郎『図解日本庭造傳』林平書店, 1890年



[図11. コンドルの著書の「真の築山の図」。本多の図にさらに英語でマトリックスを加えている。]

「型」と「型からの逸脱」の問題は、「石組」に関する記述のなかにも確認することができる。

Some writers go so far as to say that stones constitute the skeleton of the garden, that their form and distribution should receive the first attention, and that the trees and shrubs should be placed afterwards in such a way to emphasise and “support” these stones and connect them into one harmonious composition<sup>11)</sup>.

（作家達の中には、石組は庭園の骨格を成すとまで論じる者もいる。また、石の形象や配置はもっとも注意を払われるべきであり、さらに、樹木や芝はあくまでも石組を強調し、補助するものであって、全体的として調和のとれた構成をなすように置かれなくてはならないという。

「石組は庭園の骨格である」という表現は『築山庭造伝』からの引用であり、つまり「Some writers」には秋里が含まれていることがわかる。日本の庭園において「石組は骨格」であるという理解は、この表現のまま、その後の欧米人による日本庭園論に継承され、現在にまで至っている<sup>12)</sup>。石組の形と配置についての正しい判断が日本庭園にとって最も重要であるという見解には、一方で、ヨーロッパの庭園における石の使い方への批判も含まれていた。岩や石とは、シノワズリーの影響を最も具現するものであり、西欧でも庭園の材料として好まれたが、コンドルは西欧庭園につかわれる岩や石のほとんどが、全体のバランスを欠き、時には危険な状態で放置されていると描写している。西欧庭園にも岩組やグロットがあるが、それは岩石がただごろごろと置かれているに過ぎず、全体のバランスが考慮されていないとコンドルは批判している。それとは対照的に、日本庭園の岩や石は調和を重視して配

11) Conder, “The Art of”, 1886, p. 138

12) 「stones constitute the skeleton of the garden」という部分は、その後、チェンバレンやハーン、そしてモースなど欧米の日本文化論者たちや、庭園研究者たちに引用されていった。

置され、全体のバランスを保つ役割を果たしているコンドルはみなしていた<sup>13)</sup>。

[図12-13. 西欧庭園の石の例]

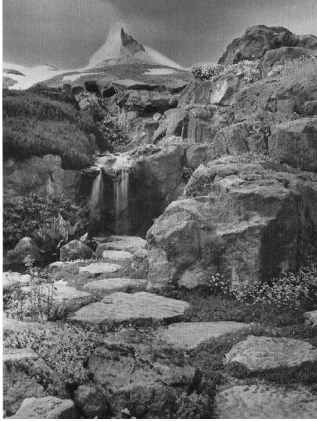


図12.



図13.

「図12. Friar Park, UK, 1890. ロック・ガーデンともいわれるが、風景庭園には、大岩をおくことが流行した。」

「図13. Goldney Hall, UK, 1737-64. イギリスの風景庭園に置かれたグロット。コンドルは、ヨーロッパの庭園では石は装飾にすぎず、日本では石組は庭園の「骨格」をなすと対置した。」

こうして、秋里を引用し「骨格としての石組」の重要性を紹介しているのだが、コンドルはそれと同時に、これらの理論が実践では必ずしもすべて守られていないこと、実践上では、別の原理が作用していることを次のように論じている。

There are other guiding principles which the landscape gardener applies to his designs, such as suitability in character to the pursuits and rank of the proprietor for whom he constructs, and the expression in his compositions of some predominating sentiment. The garden is regarded as a poem or picture intended to arouse particular associations and inspire some worthy sentiment<sup>14)</sup>.

（風景庭園の園芸家にとって他にも重要な原理がある。それは、庭と庭の持ち主との適合性があること、その土地に漂うセンチメントを表現することである。庭とは詩や絵画のようにある特定の連想を喚起し、それに見合うセンチメントを刺激するものである。）

13) Conder 1886, pp. 137-140, Conder 1893, pp. 49-51 西欧庭園のグロットや石の使い方の批判的な例として、コンドルは、パリにある Buttes Chaumont (ビュッテ・ショーモン)などを挙げている。

14) Conder, "The Art of", 1886, p. 125

「真行草」や石組みなどの理論も重要であるが、それと同様に、庭の施主の社会性や作庭する土地の本来の形状や雰囲気作庭にとってまた重要な原理であると強調している。他にも、指南書が迷信を含んでいたり、過剰に難解な表現を用いていたり、厳密に守られているわけではないことなどにもコンドルは言及している。つまり、『築山庭造伝』の理論を単に紹介するというよりは、むしろ「理論に回収できない実践上の事実」もまた存在することを説いているのである。すでに植えてある樹木や石を活かし、それを補助しつつ作庭する必要性を説くなど、指南書の理論だけに拘泥されることなく、実践的な作庭法を紹介していたといえる。土地が本来もつ特質を活かして作庭するためには、日頃からさまざまな風景をみて自然に親しむこと、さらにそれらをスケッチする習慣を身につけることを勧めるなど、まさに実践的な作庭法をコンドルが伝えようとしたことがわかる。作庭の指南書は、実践者たちからは理解しにくいと批判されてはいるが、そこに著されている理論は一通り読むに値するというのがコンドルの理解であった。つまり、秋里の『築山庭造伝』を鵜呑みにするのではなく、実践的な部分を抽出して参照する価値があるとみなしていたのである。そのため、理論は存在するが、実際には、土地や施主との関係性によって庭は生み出されるものであるとコンドルは強調したのだった。

型と逸脱の問題については、次の一文にコンドルの理解が集約されているといえるだろう——「The designer has considerable license. (作庭家はある程度のライセンスを使うことができる。)<sup>15)</sup>ここで使われている「ライセンス」とは、「芸術の法則からの解放」を意味する。真行草や石組など理論を学ぶ必要や価値はあるが、同時に、作庭家には、「ライセンス」、つまり型を逸脱する自由があるということを、コンドルは日本庭園論の中核に据えたのである。

### (3) 思想性の不在——造形に対する理解とのタイム・ラグ

最後の論点として思想に関するコンドルの記述を検証していきたい。コンドルは日本庭園の思想的背景への関心が低かったとも指摘されているが<sup>16)</sup>、確かに、作庭の方法に比して、思想についての言及は少ない。コンドルの日本庭園の思想についての理解は、どのようなものであったのだろうか。

Among the various sentiments which the horticultural artists have professed to express in their works, the following may be enumerated: The Happiness of Retirement, Long Life and Happiness, Modesty, Fidelity, Peace, Gentleness and Chastity, Connubial Felicity and Old age<sup>17)</sup>.

15) Conder, *Landscape*, 1893, p. 129

16) 渡辺俊夫「歴史性喪失というアイデンティティ：ジョサイア・コンドルの日本庭園論」稲賀繁美、パトリシア・フィスター編『日本の伝統工芸再考』国際日本文化研究センター、2005年10月、pp. 75-83

17) Conder, "The Art of", 1886, pp. 126-127.

（園芸家達が作品で表現すると主張している情趣（センチメント）とは、次のように挙げるができる——隱逸、長寿、幸福、謙讓、忠誠、安逸、品格と高潔、良縁そして老境。）

思想について言及している数少ない箇所からの引用であるが、ここからコンドルの思想に対する理解を検証してみよう。日本の庭園家が表現する情感（センチメント）として挙げられているのは、隱逸、長寿、幸福、謙讓、忠誠、品格、良縁であるが、これらの語の典拠を考えてみたい。すると、「隱逸」、「長寿」、「幸福」、「謙讓」、「老境」は道教に、そして「忠誠」や「品格」、「良縁」は儒教に関連する概念であることがわかる。これらの概念から想起されるのは、道教にせよ儒教にせよ、いずれも中国の思想である。なぜ、あるいはどのようにコンドルはこれらの概念を引用することになったのか、また、何を典拠としたのだろうか。これらを特定するには、資料が限定されており、推察の域を超えるものではないが、導入の経緯として二つの可能性を挙げてみたい。ひとつは、シノワズリーの影響下にあったイギリスで、コンドルは、中国庭園の思想的背景として知識を得たという可能性。二つ目として、コンドルが参照した江戸時代の文献からそのまま引用した可能性である。江戸時代の文献中に、庭園の思想的背景として道教と儒教が混合された形で説明がなされていた可能性は否定しきれず、コンドルがそれを典拠したことは十分考えられる。どちらであるかを特定するのは困難であるが、ここで重要なのは、造形上は明確に区分されていた日本庭園と中国庭園は、思想に対する理解においては未分化の状態であったという点である。日本庭園の造形に対する理解と思想に対する理解のタイム・ラグが生じていたことが、このコンドルの一文からは読み取ることができる。この点を明らかにするのは、今後の課題であるが、19世紀末のイギリスで興った日本庭園の造形への関心の高まりには、思想的な背景が必ずしも含まれていなかったということを示しているといえるだろう<sup>18)</sup>。

コンドルの思想性への関心の度合いは、日本庭園の歴史に関する記述と実存する庭園を紹介する箇所からもうかがうことができる。論文では、コンドルは室町時代に言及しているのみだが、論文から三年後に出版された横井時冬の『園芸考』（1889）を参照し、著書では歴史に関して一章があてられている。横井に習って、コンドルは日本史に添った庭園の変遷をまとめ、鎌倉時代と室町時代、そして江戸時代を重要な契機とみなしていた。だが、コンドルの歴史の説明において、思想性に触れられることはほとんどなかった。

鎌倉時代とは、仏教僧たちによって庭園の文化が発展した時期と紹介し、「石組は、想像上の宗教的で道徳的な性質を付与され、仏教界の仏たちを表すよう配列される」と説明しているが、仏教の教えや道徳の教えの内実とは何か、それがどのように石によって表されているのかなどにはコンドルは踏み込んでいない<sup>19)</sup>。また、室町時代に庭園文化がもっとも発展

18) コンドルの思想性と造形に関する理解のタイム・ラグについては、拙稿でも指摘した。稲賀・フィスター前掲書、pp. 84-87

し、茶の湯の影響も大きな役割を果たしたという庭園史観は、論文と著書を通じて強調されているのだが、思想の役割については触れられていない。この時代の作庭例として、龍安寺や大徳寺芳春院、そして銀閣寺や金閣寺など禅宗寺院が紹介されているが、それぞれの庭の構造や岩石の形状、そして石組や燈籠の配置などの説明に重きが置かれており、禅の思想に関する説明はなされていない。また、枯山水の成立に触れ、水の風景や山の自然の風景を表す様式であり、通常、作り方などは仏教僧たちによって神秘に包まれていると紹介しているが、特に思想についての言及は見いだすことができない。京都の庭園については、多くが破壊され放置されていると指摘している箇所もあり、コンドルが実際に庭園を訪れて観察したとは考えにくく、文献や人を介して得た知識に基づき、歴史を記述した可能性が高いが、寺院庭園に関する説明において、仏教の思想や、禅的な解釈などについてはいっさい触れられていないのは特筆に値する<sup>20)</sup>。

コンドル自身に思想への関心がなかったのか、または庭園には思想が含まれているという前提がそもそも存在しなかったのかなど、様々に解釈することができるが、いずれも推測の域を超えるものではない。しかし少なくとも、コンドルの日本庭園論では、室町時代に作られた庭園と禅の思想が必ずしも結合しておらず、禅宗寺院の枯山水の思想的背景についても記述がされていない。欧米の日本庭園論に顕著な、「枯山水＝禅の思想」という図式化が成立する前段階であったことを示しているといえるだろう。しかし、コンドルの日本庭園論における思想性の不在は、以下にみるように、日本国内の庭園研究者たちの批判を真っ向から受けることになる。

以上述べてきたように、西欧庭園に対して批判的であった点、型からの逸脱を重要とみなしていた点、そして思想に重きを置いていなかった点がコンドルの日本庭園論の中心に据えられていた。では、コンドルの日本庭園論は、国内の庭園研究者たちにどのように受け入れられたのだろうか。

### 3. コンドルの日本庭園論に対する国内の反応

コンドルに対する評価が日本国内で浮上するのは、1930年代に入ってからであった。この時期、日本国内では庭園に関する研究と教育の環境はより一層整備され、情報を交換する場や議論の場が担保されていった。海外で日本庭園への関心が高まっているということが、議論で取り上げられるようになったのもこの時期の特徴である。海外から眼差しが注がれているという自覚が共有されるなかで、コンドルの日本庭園論は評価の対象となっていった。

佐藤昌（1903-2003）は、公園の造営や緑地保全といった近代日本の都市計画において、中心的な役割を果たした人物であるが、佐藤は、「外国人の見たる日本庭園」（1933）の中で、15世紀から1920年代までの欧米人による日本庭園に関する記述を体系的に検証している。そ

19) Conder, *Landscape*, 1893, p. 32

20) 歴史については、Conder, “The Art of”, 1886, 124-125 pp., *Landscape*, 1893, 31-48 pp.

の目的は、欧米人が日本庭園を理解するうえでの「彼等が容易に陥り易い缺點」を見つけ出すことであった。佐藤は、十九世紀末以降の欧米人の日本庭園理解は、コンドルの著書から派生しているという前提に立脚していた<sup>21)</sup>。

佐藤は、コンドルの「観察の鋭敏さ」や「実際石屋へ行って調査した事がよく判明する」ほど詳しく描かれた石の説明、そして「石燈籠を最初に庭に入れた動機は照明のためでなく自然と心地よく対称する建築的装飾のため」とコンドルが独自の解釈を示したことについて「敬服」に値すると評している。その一方で、コンドルが近世の作庭書を参考文献としたことを指摘し、コンドルが「古来の単行本」に依拠して論じたと批判している。「古来の単行本」とは、特に秋里の『築山庭造伝』（1829）とそれを基にした本多錦吉郎の『圖解庭造法』（1890）を指しており、佐藤の批判は、秋里や本多を参照して、コンドルが「真行草」の型を説いた点に特に向けられていた。さらに、コンドルの説いた「真行草」が、その後の欧米人に影響を及ぼしたと評し、佐藤はコンドルの日本庭園論についての見解を次のように結んでいる<sup>22)</sup>。

庭のコンポジションについては、真、行、草、或いは平庭、茶庭、路地庭、等築山庭造伝又は本多錦吉郎氏の絵を掲げて説明し必ず之の何れかによる事と見做して居る。（中略）以後三十数年間を経た今日尚真行草の三形が厳守されて一步も之より出る事が出来ない様に信じさせ、依然として氏の説が行われて居るのは何となく我々にとって物足らぬ感は免れ得ない所であらう<sup>23)</sup>。

ここで佐藤が言うように、確かに、コンドルは秋里などに依拠しながら、「真行草」を作庭の理論として説明した。しかしコンドルは、「真行草」という理論を逸脱する実践について伝えていたはずである。従って、佐藤の指摘は的確とはいえない。つまり佐藤は、コンドルの日本庭園理解の基軸ともいえる「型からの逸脱」の部分を一意図的かそうでなかったかは不明であるが——読み落としていたことになる。

さらに佐藤は、コンドルの「真行草」の説明に影響をうけて日本庭園を論じた欧米人を次々に批判している。欧米人だけでなく、先述の本多錦吉郎に対しても、「徒にコンドル式の誤解を招かしむる結果を生ぜしめたであろう事は遺憾に堪えない」と佐藤の批判は止まない。その一方で、コンドルに依拠することなく、自由な印象が記されている旅行記などは高く評価している<sup>24)</sup>。コンドルによって「真行草」が日本庭園の重要な要素として欧米に伝達され

21) 佐藤前掲論文, 88-9 頁

22) 佐藤前掲論文, 96頁

23) 佐藤前掲論文, 97頁

24) コンドルの影響下にあるとして批判の対象としてあげられたのが、Taylor (1912), Hubbard (1917) Gothein (1913) などであった。また、コンドルの影響を受けなかったとして紀行文を記した Luffmann (1920) などを佐藤は高く評価している。

たことについて「物足らぬ感がある」という感想を抱いたのは、佐藤昌ひとりではなかった。なぜこれほどまでに「真行草」がコンドル批判の源泉となり得たのだろうか。同時期の庭園研究者のコンドルに対する評価もみておきたい。

針ヶ谷鐘吉による「コンドル博士の日本庭園観」（1934）は佐藤昌の論文の翌年に出版されたが、ここでもコンドルの「真行草」の理解に対する批判が繰り返られる。針ヶ谷鐘吉（1906-?）は、東京帝国大学農学部で林学を学んだ後、高等造園学校や東京農業大学で西洋造園史を教えた人物である。針ヶ谷は、上述の佐藤の論文を参照し、「初めて日本庭園がかなり精密な外貌を整えて欧米人の前に展開された」と、コンドルの著書を位置づけている。そこで針ヶ谷は、コンドルの著書の分析を試みるが、その対象を序章のみに限定しており、それ以外の内容に対する検証は行われていない。針ヶ谷のコンドル評価は限定された部分に基づくものであったといえるが、佐藤と認識を共有していたことが次の引用からも読みとることができる。

大体其の観察した庭園から直接得た所によるものであらうが、本書を草するに当たって数種の庭造書を参考にしてしている所から見れば、博士の日本庭園観は或る程度迄之等の書物によって導かれもし、又歪められもしているように思はれるのである。例えば『築山庭造伝』に盛られた真行草の型式に捉われて、

「日本人の間には其の芸術を精巧の度合によって三種に分ける習慣がある。即ち粗造、綿密、其の中間といふ風に。芸術作品に之等の何れが行はれても、同一設計内に於ては一つの取扱いで一貫されねばならぬ。」

となせる偏執もあり、又神秘を貴び、迷信を重んずる作庭書の教ふる内容を解釈して「単に芸術的趣味の考慮によって、容易に説明し得る様な設計の理論法則を哲学的意義の神秘と神聖とで装うのが常である。迷信的な崇敬に訴へることは藝術に純真性を保ち、奔放不羈に陥るのを防ぐ爲に必要であつたと思はれる。識者の趣味に逆うものは俗人には不吉として禁じ、美的調和を損う設計も亦不吉となし、芸術的平静を表出するものは特に吉兆として区別したのである。」となせる如き穿ち得た言葉もある<sup>25)</sup>。

針ヶ谷は、コンドルが秋里の『築山庭造伝』に依拠し、「真行草の型式に捉われて」いるとみなしていた。しかしその一方で、コンドルが『築山庭造伝』には迷信的な部分があると指摘したことを認めており、佐藤が読み落としてしまった部分をくみ上げているといえる。つまり、コンドルが鵜呑みにしていたわけではないことを知りながらも、なおも『築山庭造伝』を参照している事実に対して、針ヶ谷は批判的であったということになる。このような

25) 針ヶ谷鐘吉「コンドル博士の日本庭園観」『庭園と風景』第十七巻第一号、1934年、34-35頁



『築山庭造伝』を使うことへの一種のアレルギー的反応は、上述の佐藤の反応と一致するが、これらの反応にはどのような背景があったのだろうか。佐藤と針ヶ谷に共通する反応には、1920年代後半から形成されつつあった江戸に対する評価の一端が示されていたのであった。1920年代後半頃の日本国内の庭園研究者たちの言説を見渡してみると、室町時代に作庭された庭園の様式や思想性への高い評価が形成されつつあったことがわかる。江戸時代に成立した様式や作庭書に対する否定的な見解は、室町時代のそれへの評価といわば表裏一体のように庭園研究者たちの言説に出現するようになる<sup>26)</sup>。江戸時代に発達した回遊式庭園には、名勝地を模した縮景が多く使われていることから「写実性」が特徴とされ、芸術性や思想性に乏しいという価値基準がなされていく。それと同時に江戸時代に著された庭園書もまた、「型」に拘泥したものという評価が下されていったのであった。つまり、コンドルの日本庭園論は、秋里を参照したことを根拠に、日本国内の庭園研究における室町時代至上主義的な評価体系の生成過程という文脈に、——半ば強引に——位置づけられたのである。では、佐藤や針ヶ谷に想定されている江戸の作庭書や「真行草」には回収できないものはなんだったのか、針ヶ谷の言葉から確認しておきたい。

日本の古美術や浮世絵の真価は欧米人によって見出され、我国の人々は彼等の説を聞くに及んで漸く其の芸術的価値に目覚めた。然るに日本の庭園芸術に至っては、国土風習を異にする欧米人にとつて甚だ理解し難い存在であることを博士は認めたのである。即ち博士の所謂「好ましい空想を豊かに暗示する」という言葉は禅道や俳句の持つ幽玄味、或は茶の精神を意味するものでなくてはならない。而して之は彼等の容易に入り難い悟道の世界である<sup>27)</sup>。

庭園においては「禅道や俳句のもつ幽玄味」や「茶の精神」こそが重要であり、コンドルはそれらをくみ取ることができなかったというのが針ヶ谷の判断であった。日本庭園の「芸術的価値」が、禅や幽玄、茶という中世で発達した文化と結びついていることを示しており、江戸時代の作庭書や写実性とは対置されていたことがわかる。針ヶ谷はこれより以前にも、「京都にある室町時代の諸名園」と、写実的な江戸時代の回遊式庭園を対比させ、前者が外国人には理解しがたいと主張し、京都をローマに準えたりしてその芸術性の高さを強調している<sup>28)</sup>。このように江戸時代の庭園と室町時代の庭園を対置する評価体系に立脚していたのは、佐藤と針ヶ谷などの庭園研究者だけでなく、庭園研究の枠を越えて、当時の知識人や文

26) 拙稿「庭園をめぐる「わび」「さび」「幽玄」——1930年代における「幽玄」を中心に」鈴木貞美・岩井茂樹編『わび・さび・幽玄——日本的なるものへの道程』水声社（2006）では、1920年代後半頃から、庭園研究者たちによる日本庭園の「独自性」の模索が始まるようになったことについてまとめている。

27) 針ヶ谷前掲論文、37—38頁

28) 針ヶ谷鐘吉「巻頭言」『庭園と風景』第十四巻第十号、1932年10月、293頁

化人とされる人たちも含まれていた。ドイツへ留学して美学を学んだ鼓常良は、そうした知識人の一人であるが、書画や絵画、そして茶道にも通じていた相阿彌をルネサンス時代の芸術家に準え、相阿彌の出現が日本の庭園文化の発達を実現したと論じている<sup>29)</sup>。室町時代に庭園文化の発達が頂点に達したという歴史観は、1930年代の庭園をめぐる言説を席卷していたのである。

以上のように、コンドルに対する否定的な評価は、この時代の江戸評価を映し出すものであり、佐藤と針ヶ谷は、コンドルが秋里を踏襲したこと、そしてその影響がその後の欧米人の日本庭園論に及んだことを理由に批判的な評価を下したのであった。佐藤と針ヶ谷は、コンドルが重要とみなした「型からの逸脱」という論点をほとんど考慮することなく、評価を下していたことになる。佐藤と針ヶ谷の評価は、整形庭園への反動としての風景庭園の成立や、ピクチャレスクやシノワズリーといったコンドルの日本庭園論の背後にある思想空間との関連性が十分に考慮されたとは言い難い。佐藤と針ヶ谷によってなされたコンドルの日本庭園論に対する評価は、その後、検討の対象となることなく現在に至っており、1930年代に形成されたコンドル評価は今日もなお継承されている。

#### 4. 結 語

19世紀末から20世紀初頭の日本とヨーロッパの文化史に、コンドルの日本庭園論を照らし合わせてみえてきたのは何であったのか、またコンドルの日本庭園論の文化史的な意義とはいかなるものであったのか。結語としてまとめるにあたって、ヨーロッパの庭園史上に、日本庭園がどのように位置づけられたのかを端的に示す引用を挙げておきたい。

フランス人は庭園に幾何学的図形を配置し、イギリス人は牧草地に家を建て、シナ人は窓前におどろおどろしい滝を落下させる。すなわち三種の悪趣味。この三つを匡して、はじめて真の美に到達するのである<sup>30)</sup>。

これは、18世紀のフランスの文人ダルクール公爵が著した『造園論』からの言葉である。「三種の悪趣味」とは、フランスで発達した整形庭園、それに対するアンチ・テーゼとして成立したイギリスの風景庭園、そしてヨーロッパの庭園におけるシノワズリーの導入を指す。ここには、ヨーロッパの庭園の変遷に対する批判と、それを「匡す」新しい様式の模索が込められている。この批判と模索が、約100年という時間を経て、コンドルのヨーロッパの庭園への批判、それにかわる新しい様式としての日本庭園論の発信へと受け継がれていたといっていだろう。ここにみえるのは、整形庭園の規則性も、風景庭園の不規則性も極端に発

29) 鼓常良『日本芸術様式の研究』1933年

30) ダルクール公爵『造園論』(1774)の言葉であるが、本稿では、ユルギス・バルトルシャイティス『アベラシオン』(種村季弘・巖谷國士訳、国書刊行会、1991年)の中の翻訳を採用した。「シナ人」とは蔑視的な呼称とみなすことができるが、原典が含むニュアンスにより近い翻訳であると判断した。

達し、さらにシノワズリーの影響によって人為的な装飾性でヨーロッパの庭園が彩られていったことを問題視するという文脈に、コンドルが立脚していたことであろう。ヨーロッパの庭園史において、「自然らしさ」の喪失が、ひとつの問題として共有され、そうした文脈に、日本庭園が受容されていったのであった。新しい要素を絶え間なく取り入れようとする欲求と、「自然らしさ」の復権という目的が、コンドルの日本庭園論の裏側に作用していたともいえる。コンドルの日本庭園論には、イギリス、ひいてはヨーロッパの庭園が、どのように「異質なもの」を受け入れ、また馴致してきたのかの変遷が集約されており、19世紀末のヨーロッパで日本庭園への関心がどのようにわき上がったのか、また、日本庭園を受容するに至ったのか映しだされていたのである。

また、コンドルに対する一方的な評価には、江戸時代と室町時代の様式を対置する日本庭園史観が日本国内の庭園研究者たちによって構築されつつあったことが映しだされてもいた。日本では、コンドルの日本庭園論は江戸時代の作庭書を参考にした点のみが特化され、否定的な評価が1930年代に相次いでくださされてしまう。秋里の『築山庭造伝』を参照したことは、造形のみへの関心、すなわち思想性への言及の欠如とみなされ、コンドルの理解は、表面的なレベルに終始したという評価へと繋がっていった。しかし本稿で考察した結果、このような一方的ともいえるコンドルへの評価は、日本庭園をどう理解するのか、またその独自性をどのように定義するかなど、日本国内の庭園研究者たちによる日本庭園像の形成過程を映しだすものであった。コンドルに対する批判の内実とは、国内の研究者たちによって室町と江戸の庭園様式を対比するような、極端で、二項対立的な価値体系が構築されていたことを反映していたのである。

しかしコンドルは、江戸時代の作庭書を参考としながらも、無批判に受け入れたのではない。批判的な解釈を交えながら実践的な知識を抽出し、ヨーロッパの読者たちへと伝達したのである。つまり、時代に応じた解釈を用いて江戸時代の理論を継承したのであり、前近代から近代の文脈に適応するように変換をしたともいえる。日本庭園に対する理解の近代化が、コンドルの日本庭園論には実現されていたのである。

以上のように、コンドルの日本庭園論が担った役割、あるいは担い得たはずの役割が十分に検討なされていない事実は、日本国内の庭園研究における価値体系が、1930年代に構築されたまま、現在に至るまで相対化されていないことを意味している。コンドルの日本庭園論を再考することは、庭園を受容する側と発信する側との往還がおりなす文化史を再構築する作業ともなり得るだろう。

※文中の日本語訳はすべて筆者による。

#### 参 考 文 献

安西信一『イギリス風景式庭園の美学——〈開かれた庭〉のパラドックス』東京大学出版会、2000年

- 「ピクチャレスクの「移植」」金田晋編『芸術学の100年』勁草書房，2000年，156-185頁  
片平幸「庭園をめぐる「わび」「さび」「幽玄」——1930年代における「幽玄」を中心に」鈴木貞美  
・岩井茂樹編『わび・さび・幽玄——日本的なるものへの道程』水声社，2006年  
川崎寿彦『庭のイングランド——風景の記号学と英国近代史』名古屋大学出版会，1983年  
佐藤昌「外国人の見たる庭園」『園芸学会雑誌』第四巻第一号，1933年4月，83-106頁  
——— 『日本公園緑地発達史（上・下）』都市計画研究所，1977年  
進士五十八『日本庭園の特質』東京農業大学出版会，1987年  
鈴木博之『建築の世紀末』晶文社，1977年  
——— 『建築家たちのヴィクトリア朝：ゴシック復興の世紀』平凡社，1991年  
——— 『ゴシック・リバイバルの崩壊』中央公論美術出版，1996年  
鈴木誠『欧米人の日本庭園観』（造園学論集別冊 No. 2）東京農業大学，1997年  
高山宏『目の中の劇場——アリス狩り』青土社，1985年  
——— 『庭の綺想学——近代西欧とピクチャレスク美学』ありな書房，1995年  
鼓常良『日本藝術様式の研究』内外出版印刷，1933頁  
針ヶ谷鐘吉「巻頭言」『庭園と風景』第十四巻第十号，1932年10月，293頁  
——— 「コンドル博士の日本庭園観」『庭園と風景』第十七巻第一号，1934年，34-35頁  
ユルギス・バルトルシャイティス『アベラシオン：ユルギス・バルトルシャイティス著作集1』種  
村季弘・巖谷國士訳，国書刊行会，1991年  
本多錦吉郎『図解日本庭造傳』林平書店，1890年  
横井時冬『園藝考』大八州学会，1889年  
渡辺俊夫「歴史性喪失というアイデンティティ：ジョサイア・コンドルの日本庭園論」稲賀繁美・  
パトリシア・フィスター編『日本の伝統工芸再考：外からみた工芸の将来と可能性』国際日本文  
化研究センター，2005年10月，pp. 75-83  
Conder, Josiah. "The Art of the Landscape Gardening in Japan", *Transactions of the Asiatic Society of  
Japan*, Vol. XIV, Yokohama: R. Meiklejohn & Co., 1886, pp. 119-175  
——— *Landscape Gardening in Japan: With the Supplement of 40 Plates*, New York, London: Kelly &  
Walsh, LTD, 1893  
Gothein, Marie, *Geschichte der Gartenkunst*, Jena: Diederichs, 1913  
——— *A History of Japanese Garden Art*, London: J. M. Dent & Sons/E. P. Dutton, 1928  
Hearn, Lafcadio, In a Japanese Garden, *Glimpses of Unfamiliar Japan*, New York: Harper, 1894  
Luffmann, C. B., *The Harvest of Japan: A Book of Travel with some account of the trees, gardens, agriculture,  
peasantry, and rural requirements of Japan*, London: T. C. & E. C. Jack, Ltd., 1920  
Taylor, Basil. *Japanese Gardens, with twenty-eight pictures in colour by Walter Tyndale*, London: R. I.  
Methuen & Co. LTD., 1912  
Morse, Edward. *Japanese Homes and Their Surroundings*, Boston: Tick nor and Company, 1886  
Phaidon, *The Garden Book*, London: Phaidon Press, 2000  
Thacker, Christopher, *History of Gardens*, Oxford: Oxford University Press, 1979  
——— *The Genius of Gardening*, London: Weidenfeld & Nicolson, 1994

## Cultural History of Japanese Gardens —An analysis of J. Conder's writings on Japanese Gardens

Miyuki KATAHIRA

*Landscape Gardening in Japan* (1893), by Josiah Conder (1852-1920), an English architect, is one of the earliest systematic outlines on Japanese gardens published in English. Since its publication, *Landscape Gardening in Japan* has frequently been referred to by Western authors of Japanese Gardens, including scholars in various fields, essayists, travel writers and so on, and has become a prototype of the study of Japanese gardens in European languages. However, Josiah Conder's writings on Japanese gardens had been disregarded for some while by Japanese scholars of gardens, and it was in the 1930s that a few of them strongly criticized Conder's writings. Since then, Conder's writings have been neglected within their circle, and consequently have hardly been discussed in the academic study of gardens within Japan. On the contrary, Conder as an architect has been studied extensively and his achievement has been recognized in the study of architecture in Japan. It is worth noting that how Conder has been regarded by the Japanese gardens scholars considerably differs from those in the field of architecture and authors who have written about Japanese gardens in the Western countries. Then, where has such difference come from, or in what way has such difference appeared?

The essay will closely look at the Conder's writing on Japanese gardens and the reaction of Japanese scholars of gardens in the 1930s, with reference to the historical contexts in both England and Japan. Conder's writings are more than introduction of Japanese gardens to the readers of the West, in fact, they reflect how the interest toward Japanese gardens had been formed in late 19th century England. In his writings, Conder testifies how gardens in Europe have historically domesticated and adopted different styles from all sorts of various cultures over the centuries. By using the terms such as Picturesque and Chinoiserie, I will clarify the cultural and historical context of how Japanese gardens were perceived in the late 19<sup>th</sup> Europe.

The ways the Japanese scholars reacted to Conder also implies the process in which the academic circle concerning Japanese gardens in the 1930s was constructing a certain value system. That is, the gardens built in or the styles developed in the Muromachi period (1336-1573) were regarded as high art, whereas, those of the Edo period (1603-1867) were considered as mere representation of natural scenery and thus have nearly the same value as the ones of the Muromachi period. The idea of establishing such hierarchical value system arose from the desire of garden scholars in Japan to establish an *authorized* history of Japanese gardens which should be comparative to the history of European gardens.

This essay will analyze Conder's writings and the reaction of Japanese scholars, and aims to

draw a cross-cultural history of Japanese gardens in the late 19<sup>th</sup> and early 20<sup>th</sup> century.